藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

イセカルチュラルファンデーション 第７回「美術学生展 in NY 2011」デビッド・ソロ賞

石井　亨

◆大学院美術研究科博士後期課程美術専攻（工芸・染織）１年

幼稚園のころからサッカーづけの日々で、将来の夢はプロになり世界で活躍することでした。小学校では学外のクラブに所属していました。絵も得意で校内の写生会で金賞を受賞しましたし、学校の成績は体育と美術だけは５でした。高校はサッカーが強く、美術も学べる埼玉県立伊奈学園総合高等学校に進学したのですが、部員は100人ほどいて、同級生にも中学時代の有名クラブの選手が集まっているのを見て、まもなくサッカーは諦めました。そこで今度は、美術で世界を目指そうと東京藝大へ進学することにしたのです。

小学校のころから一緒にサッカーをしていた仲間たちは、日本代表、さらには世界を目標にしている人ばかり。幼馴染みに後に日本代表となる佐藤勇人、寿人兄弟もいて、２人が次第に有名になっていくのを傍で見ていました。サッカーを諦めた友人たちもそれぞれの分野で世界を目指すという意識は変わらず、とてもよい環境にいたと思います。

藝大入学前の進学予備校では、コム・デ・ギャルソン、イッセイ・ミヤケといったファッションブランドの国際的評価を知り、テキスタイルに興味を持ちました。憧れの対象が、それまでの三浦知良選手や中田英寿選手から、川久保玲さんや三宅一生さんに変わったのです。藝大でも工芸科（染織）に進むと決めていました。

友禅染は、江戸時代の中期に奢侈禁止令が出され、豪華な金糸や手の込んだ刺繍が禁じられたとき、反物を染だけで鮮やかに彩る技法として編み出されたとされています。マスキングにもち米糊を使い、豆乳で染めるなど、極めて日本的な素材を使います。フラットで「ライン（輪郭）」がはっきりしているうえ、なによりも美しい「発色」が特徴です。卒業制作は、幅１メートル、長さ４メートルの生地を５本、暖簾のように垂らし、それが一枚の絵画のように見えるという作品でした。伝統的な友禅染の技法で、人物と都市の構造を「グラフィティ」（スプレーやフェルトペンなどを使い、壁などに描かれた落書き）調のモノクロによって描き、「音」を表現したつもりです。

今回受賞した賞はアメリカと日本の学生が応募して競い合うもので、ぼくの作品を選んでくださったデビッド・ソロさんは著名なコレクターの方だそうです。メディアや観衆の賞ではなくコレクターから評価されたことにビックリしましたし、素直にうれしいですね。2011年は夏から秋に東京オペラシティアートギャラリーで個展も開催し、そのこともあり、外資系のコーヒー・チェーンから、コミッションワークの依頼があるという反響もありました。

将来的にはイギリスかアメリカを活動拠点にしたいですね。日本の伝統技法のひとつである友禅染は、世界に出ていくための「最強の資源」になるのではないかと考えています。

いしい・とおる
1981年静岡県生まれ。東京藝術大学美術学部工芸科（染織）を経て、同大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻（染織）修了。2007年、「第８回スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル」で審査員奨励賞受賞。2008年、チェルシー・カレッジ・アート・アンド・デザイン修士課程テキスタイルデザイン科交換留学。2010年、ミヅマ・アクションで個展を開催。2011年、東京オペラシティ アートギャラリーで「project N 46 石井亨」を開催。同年「イセカルチュラルファンデーション　第７回「美術学生展 in NY」でデビッド・ソロ賞を受賞。

「再保存 – 衝立鷹模様」
友禅染 / 絹 / パネル /107x107cm / 2011

第80回日本音楽コンクールピアノ部門第1位

浜野与志男

◆音楽学部器楽科（ピアノ）4年

日本音楽コンクールの本選では、プロコフィエフのピアノ協奏曲第2番を演奏し第1位をいただきました。この協奏曲を初めて弾いたのは海外で、国内では2009年に大友直人先生指揮・東京交響楽団とよこすか芸術劇場で、また2011年5月にも山田和樹先生指揮による藝大フィルハーモニアと奏楽堂のモーニングコンサートで演奏しています。とても深い形而上学的な内容さえもつ難解な曲なのですが、「オーケストラとの対話があり、また溶け合うところもあり、圧倒的な感動があった」との評価をいただきました。

僕は東京生まれ東京育ちですが、母はロシア・モスクワの出身です。日本音楽コンクールの本選でプロコフィエフを選んだように、母から受け継いだ血のせいか、これまで何かとロシア音楽に注力してきた側面がありますが、価値ある芸術家に成長するためにはロシア音楽だけでは全く不充分ですし、決してロシア音楽専門の音楽家になりたいわけでもありません。バロック期の音楽から現代を生きる作曲家の音楽まで、空白を残さず挑戦していきたいと思っています。

それでも、近年、関心が高まってきたロシア音楽の魅力を伝えていきたい気持ちはあります。シューマンやブラームスに代表されるドイツ・ロマン派の音楽は個人の内面性が強く表れていますが、それに対し、ロシア音楽は一個人という枠を超えた、何かとてもスケールの大きなものに手を伸ばしたいという願いが脈々と熱く息づいている音楽であると感じていますから。

東京藝大の附属音楽高等学校を卒業後、引き続き東京藝大へ進学したことは本当に正しい選択だったと思います。器楽科（ピアノ）の仲間とはこの7年間、高いレベルで切磋琢磨することができました。他科でほかの楽器に取り組んでいる先輩、同級生、後輩からも刺激を受けますし、美術学部の方々ともチャリティコンサートの共同制作などを通じて協業することができました。また、学内演奏会やモーニングコンサートのように、一般の皆様の前で演奏する機会が与えられるのも藝大ならではのことでしょう。

僕は自分のためだけの音楽という視点ではなく、音楽で何ができるかを幼いころから長い間考えてきました。少々ナイーブかもしれませんが、世界中で最も辛い思いを強いられている方々を支え続けることも、音楽芸術の使命の一つであると信じています。その考えに共感してくれる仲間とともに、バングラデシュ支援のチャリティコンサートを催し、東日本大震災の被災地での演奏会も開催しています。音楽に限らず、芸術とは社会に根ざした存在であり、芸術には人の心を癒すだけではなく、人々にヒントを与え、奮い立たせる力があると思うのです。

第80回日本音楽コンクール
（2011年10月）本選での演奏
© 毎日新聞社提供

はまの・よしお
1989年東京生まれ。桐朋中学校、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校卒業。これまでにピアノを石本裕子、M.プロゾロワ、松本裕子、V.サハロフの各氏に、室内楽を伊藤恵、川中子紀子の両氏に師事し、現在はピアノを岡田敦子、E.アシュケナージ、御木本澄子の各氏に師事。2011年夏、「ロシア音楽国際ピアノコンクール」第2位およびロシア音楽最優秀演奏賞。同年10月、「第80回日本音楽コンクール」第1位、併せて岩谷賞（聴衆賞）、野村賞、井口賞、河合賞を受賞。

アニメーション「おにしめ おたべ」の１シーン

いまばやし・ゆか
1985年千葉県生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科（油画）卒業。2011年、「おにしめ おたべ」で「富山水辺の映像祭2011」グランプリを受賞。同作品で「取手野外映画祭2011」ショートショートフィルムコンテスト大賞および取手市長賞、「ASIAGRAPH2011」公募第二部門で優秀作品、2012年、「第11回東京アニメアワードコンペティション」で学生部門／優秀賞を受賞。その他受賞等多数。

富山水辺の映像祭2011 グランプリ

今林由佳

◆大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻２年

美術の世界を目指したのは、高校１年生のとき、初めての美術展「横浜トリエンナーレ」で束芋さんの作品を観たのが大きなきっかけでした。テレビで見るアニメとは違う“動くイラストレーション”が、海外の人に評価され、アートとして大人も楽しんで観ていることに衝撃を受けたのです。イラストを描くのが好きだった私は、これなら「美術」にかかわれるかもしれない、と思いました。

進学予備校で油絵の魅力に惹かれ、表現方法を自由に選べると思い、東京藝大の美術学部絵画科（油画）に進学しました。いざ入学してみると、アニメーションのつくり方がわからず、代わりに油絵や色鉛筆、水彩、木版、リトグラフ、シルクスクリーンなどさまざまな画材や技法を使って絵本をつくっていました。しかし、アニメーションへの憧れを捨て切れず、新設された大学院映像研究科のアニメーション専攻への進学を目指し、卒業制作はアニメーションで取り組むことにしました。

卒業制作は、芸術作品としての評価が得られるものではありませんでした。しかし、家で観るようにじっくりと見てくださったご夫婦や親子など、来場者の方から「あたたかいね」「優しい作品だねぇ」「涙がでちゃった」との言葉をいただき、評価の幅に戸惑いつつ、アニメーション表現への想いを強くしました。

希望どおり大学院映像研究科アニメーション専攻へ進学することができ、岡本美津子教授の指導を仰いでから、私の作品は、アートの文脈に限らず、誰でも気軽に触れられる「メディア」をとおした表現により近い、と自覚するようになりました。岡本教授は、誰に向けて、何を伝えたいのか、メッセージを明確化し、加えてそこに新しさがあるのかを必ず問います。グランプリをいただいた作品「おにしめ おたべ」も、教授の客観的視点と、新しさへの挑戦の後押しがあり完成しました。

グランプリをいただいた「富山水辺の映像祭」のテーマは「笑顔」でした。そのテーマから、作品の中心をまっすぐに評価していただける映像祭と思い応募したので、グランプリ受賞は本当にうれしかったです。「おにしめ おたべ」は、家族のためにお煮しめをつくる母親とそれを横でみている子ども、その料理ができあがるまでを描いた短編アニメーションです。画面には食材とお鍋しか出てきません。食材のきぬさやが魚であったり、にんじんがカニであったり、そういう見立てを楽しみながら、食材ひとつひとつが命そのものであること、また家族がともに食事できることの喜びの気持ちを込めて制作しました。

私の夢は、アニメーションづくりが養護教育に生かされる道をつくることです。アニメーションは、写真や絵の積み重ねからなるので、根気強く取り組めば、映像の尺（長さ）となって現れ、努力は実を結びます。完成した作品の上映会をすれば特別な一瞬に出会い、共有する歓びや自己肯定感を得られると思います。さまざまな映像が溢れる今、音と映像の原理や不思議さを体感し、仮想世界を現実につなぐ力がアニメーション教育にはあると感じます。何よりつくる楽しさがそこには待っています。そのような機会をつくる担い手になれたらと思います。